

幼児の思考の特徴



滝沢 武久

幼児は、幼児なりの世界観をもっている。それは、まず、三歳ごろの「質問期」を出発点としている。

質問は、子どもの好奇心のあらわれであり、おとながこれにあたる答えのおかげで、子どもは自分なりに、世界に対するみ方を、つくりあげていく。この好奇心は、いわば感情移入的なものをもっている。ちょうど、野球の観客が、知らず知らずのうちに、観客席から身をおどらせて、投手の身ぶりをやってしまうのとおなじように、子どもの好奇心にも、積極的な行動がともなっている。

だから、ある物についての質問にたいして、その物の性質だけを説明してやっても、答えにはならない。子どもは、その物のとりあつかい方、ないし、その用途を知りたいのだ。

たしかに、子どもの質問のすべてを答えてやるのは、神さままでなければできないだろう。たとえば、

「赤ちゃんは、どこからどうやって生まれてくるの？」

などという質問は、わたくしたちを困らせる。しかし、答えがむずかしいからといって、全然答えてやらないのは、それ以後の知的好奇心の源泉をからしてしまうことにもなりかねない。子どもの好奇心は、この時期の知的教育のもっとも強力な推進力の一つなのだ。だから、わたくしたちは、子どもの好奇心を、むしろ、伸ばす方向へもっていかなければならぬ。そして、そのためには、ものを観察する機会を、豊かにあたえてやる必要がある。

しかし、子どもの目は、けっしてレアリスティックではなく、むしろ、自己中心的にしかものをみない。だから、未知のものの前では、ものごとをすべて、自分自身の経験に還元させてしまう。これは、自分と自分をとりまく世界とが、まだ充分に分化していないことによるのだ。

そこで、子ども独得の考え方がでてくる。たとえば、すべてのものは人間によってつくられたのだと考える「人工論的心性」、すべて

のものが生きていると考える「汎心論的心性」、すべてのものがすべてのものと関係していると考える「魔術論的心性」などがそれだ。

人工論的心性の例（六歳児と四歳児との会話）

——「ぼくは、どうやって赤ちゃんがつくられたのか知りたいんだ。」

——「肉でつくるんでしょ。」

汎心論的心性の例（四歳半の子ども）

——「寒いから、雲が、動くんです。」

——「どうやって動くの？」

——「ひとりで動くんです。寒いとやってきました。太陽が出るといなくなり、寒くなるとまたやってきました。」

魔術論的心性の例。（四歳半の子ども）

——「ぼくは、スープのパンがあんまりおいしくなかったから、足でけりました。足でけると、スープのパンはおいしくなるんです。」

子どものこういう考え方は、おとなのことによって強化されることが多い。おとなが子どもに、空想的なおとぎばなしをきかせてやるとき、また、おとながときどき比喩を会話の中でつかうとき——たとえば、「この仕事は、暗礁に乗り上げちゃったよ」等々。——子どもは、それを自分なりに理解し、子どもの世界観がつくられてしまう。

ただし、世界観といっても、おとなの世界観のように、組織的な

ものではない。おとなのような抽象能力も想像力もっていない上に、子どもは、生活するのに忙しすぎて、世界観の体系などをつくるまでにはいかない。子どもの世界観は、いわば、断片的な世界観なのだ。

ことばは、たしかに、思考の基礎である。子どもの思考は、ことばのおかげで、明確となり、思考が感情や行動に支配されていた状態から、ぬけ出すことができる。具体的な現実を、客観的に眺め、それをよく記憶し、人に話すこともできる。

だから、二か国語をつかう家庭環境の中にいる子どもは、この二つのちがった言語体系に応じて、自分の思考を組織していかなければならないので、かなり大きな障害を感じる。知的発達が若干おくれることさえある。

だが、幼児は、おとなのことばを、けっして充分には消化できない。アメリカの心理学者のゲゼルは、四歳とは、「口では七十七までいえるのに、じっさいには、四までしか数えることのできないような年令だ」と定義した。つまり、ことばばかりが過剰で、それを裏づける概念の方は、あやふやな時期なのだ。

フランスの心理学者ワロンは、こういう概念の裏づけないことばによる思考を「前範疇的思考」とよんだ。

「前範疇的思考」の典型は、「対」による思考だ。子どもは、ものを考えるとき、いつも二つのものを連想しながら、思考をすすめていくものだ。

白と黒

風と煙

月と夜

など、二つのものが密接にむすびついて、子どもの思考の上にのしかかっている。しかし、対と対との相互関係については、まったく無視されているのだ。

たとえば、ヒヨコが大きくなると、ニワトリになり、ヒヨコは卵から出てくるし、卵はニワトリから出てくることを知っている子どもが、ニワトリが卵から出てくるということは、どうしてもわからない。「卵とヒヨコ」、「卵とニワトリ」という二つの対を関係づけようとはしないのだ。

はんたいに、二つの対を、奇妙なかたちで関係づけることもある。たとえば、「煙と空」、「空と天国」という二つの対がむすびついて、その共通項の「空」がなくなってしまう、「煙は天国だ」という結論を出して、じっさいにそう思いこむのである。

これらは、まったく、ことが現実とむすびついていないために生じる未分化な思考だ。ここでは、思考を分析したり、総合したりするはたらきはない。こういう思考様式を、ワロンは、「混同性」とよんだ。子どもの思考が、混同性にもとづいているからこそ、さっきのべたような自己中心的な世界観も、出てくるのである。

ところで、子どもが現実をみる目は、きわめて感覚的だ。ものの客観的な関係には目がむかず、その外見ばかりにとらわれている。

「感性的認識の段階」だといってもいい。

たとえば、子どもたちのみている前で、粘土のかたまりの形を変えよう。すなわち、おせんべいのように平べったくおしつぶしたり、ソーセージのように、長い棒をつくったりする。子どもたちは、さっきの粘土に、何もつけ加えられたり、とり去られたりしてはいないことは、よくわかっている。それなのに、ある子どもは、さっきの粘土のかたまりよりも多くなったという。その理由をきくと、「だって、こういうかたち（おせんべい型）にすると、巾が広がるんですもの」とか、「こういうかたち（ソーセージ型）にすると、長くなるんですもの」と答える。また、ある子どもは、はんたいに、おせんべい型はうすいから、ソーセージ型は細いから、さっきの粘土よりも少ないんだ、と主張する。

子どもたちは、ただ、みたままのものを考えるだけなのだ。うすければうすいほど巾が広くなるとか、細ければ細いほど長くなる、とかの関係を考えることはできない。また、かたちがいくら変わっても、もともどもせば、おなじ粘土のかたまりになるのだ、という可逆的な考え方もできない。要するに、子どもには、みたままのものをのりこえて、全体を組織して考える「全体的な見方」が欠けているのである。

こういう思考様式は、子ども絵の中には、きりあらわれてくる。たとえば、人形の絵をかかされると、顔の輪郭の外側に、目や口をかいたり、胴からずれた場所に、腕をかいたりすることがある。こ

のような絵をみて、ひどく心配して、やかましく小言をいう親がよくなるものだが、その結果、子どもたちは、絵をかくこと自体に恐怖心をもってしまい、もう絵をかかなくなるようなことが多い。

だが、じつは、こういう絵こそ、子どもの自然のままの思考を、表現しているわけなのだ。つまり、子どもは、いろいろな要素を、同時に考慮することができないために、正面からみた人形の姿とか、真横からみた人形の姿とかが、並置されたまま、絵に表現されることとなるのだ。だから、必ずしも、この子に、絵の能力がないときめつけるわけにはいかないのである。

子どもが、問題全体をみわたすことができず、順序も組織もなく、断片的にしか考えることができないことを、スイスの心理学者アンドレ・レイは、実験的に確認した。

部屋の中にモノをかくして、子どもにそれをさがさせる。まず、子どもは、部屋の隅にある箱に目がつく。そこで、その箱のふたをあけようとして、部屋を横切る。ところが、途中で、ほかのものに目がうばわれて、そちらの方向へひきかえす。だが、ひきかえす途中で、突然、第三のものが目に映る。で、これをしらべようとして、第二のものの探索も、やめてしまう。子どものこういう行動は、あたかも、水滴の中の滴虫の運動をおもわせるものがある。

ものをさがすためには、まず仮説を立てて、その仮説をじっさいにたしかめ、もしみつからなかったら、またちがう仮説を立てて、たしかめる、というやり方が必要なのだが、五歳以前の子どもに

は、それができない。仮説をつくらないで、すぐに、自分の行動が効果的であると思ひこんでしまう。そして、子どもの探索は、仮説によってみちびかれているのではなく、つきつぎに目に映る外部の刺激によって、いわば外側から、みちびかれている。だから、何とも何ども、おなじ場所をさがすこともあるし、全然触れることなしに終わってしまう場所もある。

しかし、五歳をすぎるころから、きわめて原始的なかたちだが、一種の計画性が芽生えてくる。

たとえば、鈴木ビネー知能検査で、「一度に命令された三つの用事をすまずこと」は、五歳になればできなければならぬ仕事だとされている。五歳以前の子どもは、一時に、たった一つの用事しかひきうけることができないものであって、もし二つ以上の仕事をやらせても、一つ以外の仕事は、忘れてしまうのだ。順序をふんで、気を散らさないでやるということは、幼児にとっては、たいへんむずかしいことなのだが、しかしこれは、関係的思考の出発点である。

たしかに、幼児の思考には、頭の中で、論理を組み立てて、推理したり判断したりするはたらきは、まだできていない。しかし、この時期に、日常生活の中で、具体的なものや具体的な行動を通じて、ものの論理的な関係に目をむけさせることは、これからきき、子どもの考える力をのばしてやる上に、ぜひ必要なことなのだ。

この時期に、直観的に獲得した論理性は、小学生期のあいだに、内面化されていくのである。